

編者はしがき

本篇は、本全集第22巻『教育篇　「生長の家」の児童教育法』、第39～41巻『教育実践篇　人間を作る法』(上・中・下)に続く谷口雅春先生の児童教育に関する第3弾である。

第22巻の「教育篇」で、谷口雅春先生は「生命の教育」を提唱される。「。生命の教育」というのは概括して言えば、人間の生命のうちには、無限の可能性が宿つている。その内部生命の、無限の可能性をみとめて、それを引き出す教育という意味である。在来、教育とは知識を詰め込むことだと思う人が多かつたが、本来、教育とは、わざと具体的な方法を提唱しておられる。

“education”すなわち、‘引き出す。’という意味なのである」(第22巻「はしがき」)と述べられ、その‘無限の可能性。’を引き出すための具体的な方法を語られていく。

たとえば、子供を礼拝せよ、生命力を建設的な方向に使用させよ、子供に仕事・手助けの機会を与える、子供に遊戯を与える、精神集中と自己暗示法を駆使せよ、想像力を養成せよ、恐怖心を取り除け、子供との対話は積極的な明るい話ばかりをせよ、善きことのみを行う習慣を付けよ、「善き言葉」「讃嘆の声」を雨ふらせよ、等々ときわめて具体的な方法を提唱しておられる。

次の「教育実践篇」では、子供の教育とともに、すべての人間に共通する「人間教育」にも言及されている。

「人間本然の善さをすべての人に知らせること、これこそ人間の本当の教育であります。この人間の神性、仮性を現すという眞実唯一の教育が「生長の家」の教育法なのです。この教育法によりまして人々を教育して行つたならば、大いなる効果をあげられることは必然であつて、現に「生長の家」の教育法によつて多くの効果を上

げている方がたくさんある」（第39巻・二〇七頁）

そしてこの「生命の教育」とは「解放と引出の教育」であり、子供への数々の束縛を取り除き、神の子たる子供の実相を引き出すことが「生命の教育」の核心であることが説かれている。

前著二篇を承けて、本篇「児童教育篇」では特に親と教師に向かって「生命の教育」とは何かを説いていかれる。

「真の教育はしょせん、人格と人格との接触によつて行なわなければならないのである。人たるもののが本質（実相）は「神性」または「神性」である。教師が内部にある自己の神性を開顯して、児童に接触するとき、児童の内部に宿つてゐる神性が引き出されるのである。教師みずからがその肉体的労力を賃金によつて切り売りする労働者にすぎないと自覚して肉体的な利己的、我欲的な面のみを露呈して児童を教育するならば、児童は利己的、我欲的な面のみを発達せしめられて円満完全な人格を成長させることはむつかしいのである」（はしがき）

親や教師という教える側が先ず自分の本質が神の生命であると自覚し、その神の子の自覚をもつて子供という神の子に接する、即ち神の子の生命が神の子の生命と触れ合う、いのちといのちが触れ合つて火花を散らす、それが教育であると言つていられるのである。

「生長の家」の教育法は、「一言で言えば、どういう教育法であるかと言いますと、人間の中に宿つてゐるところの神なるもの、仏なるものを引出すところの教育法であります。それは如何なる方法によるかと申しますと、「言葉の力」に依る。言葉の力によつて人間に内在しているところの「無限の力」を引出す、これが「生長の家」の教育法の中心であります」（七頁）

今までの教育家のやつておられる教育法を見ますと、大抵は人間のわるいところを見附けまして、それを「ここがわるいから直せ」というふうなことを常に言つて来たのであります。そうして「お前は出来がわるいからよく勉強せよ」こういうような調子で教えて來たのであります」（七八頁）

そう説かれて、その具体的な実例を多く紹介されている。例えば、子供が叱られると、いつも「お前は大きくなつても泥棒にしかならない」と言われていた子供がそのままの通りの泥棒になつた実例、青酸カリによる自殺が報道されると統いて何人も類似の青酸カリ自殺が多発した実例など、「言葉の力」によって引き起こされた実例が挙げられている。

そして、谷口雅春先生は、力を込めて言われる。

「このように吾々は言葉を慎まなければならない。言葉は神であつて、言葉によつて総てのものは創られたということが聖書の中に書いてあります。そのように禍福は言葉の中にあるのであります。ですから、この『言葉』を非常に重んじて、善き言葉ばかりを使い、善き読物ばかりを読むようにならぬではないかというのが、生長の家の人類光明化運動であります。すべての人類よ、言葉の力を知れ、そして善き言葉によって人間の神性を招び出そうではないか、これが生長の家の人類光明化運動であります」（二三頁）

その「言葉の力」を駆使して教育を行うことが「生命の教育」であると、谷口雅春先生は説かれるのである。そして、本篇の締め括りとして、谷口雅春先生の教えを受けた教師六名の教育体験談が収録されている。

是非、本書を熟読されて「生命の教育」の神髓を会得されることを願うものである。

令和三年八月吉日

谷口雅春著作編纂委員会